

## 説話に描かれた子ども No.3

### — 『沙石集』における子どもの構造 I —

## The Children Described In Literary Works No.3

### — Structural Formula Of Children In "Shasekisyu" I —

小 西 律

Ritu konishi

#### はじめに

筆者は前号で説話文学に子どもの生きる姿を求め論考した。説話文学における子どもは、極限の状況で生きる者として描かれるかという、いわば弱き者としての立場で捉えられたものであった。しかし説話中に描かれた子どもは果たしてそれだけなのであるかということと共に、現代に生きている子どもに通底するものが描かれた子どもの姿もあるのではないか。その重なりあった部分から時代を超えた子どもの普遍性を捉えていければと考える。

本論では前号まで、論を進めてきた概観的な作業を『沙石集』を基に「子どもの構造」として深めていく。前号で取り上げた数々の説話は「困難に立ち向かう子ども」の存在が極めて明瞭に読み取ることができる。説話はその説話の意図として「子どもとはかくあるもの」または「かくあるべきもの」そして「かくありたいもの」を内包しているのではないか。あるがままの子どもの行為が説話化していく段階での作者の属する階層（宗教者）とそれを取り囲む社会の思念が構成をつくり社会に流布できる構成を形作っていったと思われる。そうであるならば、そこに描かれる子どもは現代の子どもを取り巻く高度資本主義経済と消費、複製文化とメディアの影響なども重ねあわせ、そのなかから普遍性は求められるのではないかと考える。

『沙石集』の時代を確認しておきたい。鎌倉幕府は執権の北条氏のもと日本全土の統治をしているが元寇の役の余波等により「ご恩と奉公」の均衡の喪失により潜在化した社会不安は増大化しつつあった。それは幕府権力の基盤である御家人の疲弊となって現れている。かつて「一所懸命」といわれた土地は幕府が嫌う非御家人に売買されだしている。この現状にたいし幕府は対症療法的政策である「土地売買の禁止」を出すにすぎなかった。このような状況下『沙石集』は題材に説話化を計っている。前号で論じた「自身の向上のために、困難に立ちかう子ども」もその例である。子どもの構造は多くの構成要素、「無知と無垢」「非力と未来への可能性」「粗野と純朴」が混在、共

存した行為（体力で大人に劣るが、至純である行為に天が助けるなど）などがあげられる。その存在は、親のなにか（動産、不動産、すなわち所領、あるいは名誉と、技術等）を継承し、年を経て老い死を迎えることは現代と何ら変わることはない。自由、闊達にそして哀れに『沙石集』の内に描かれる。子どもは、時間的に見れば継承者であり空間的には見れば非大人である。継承者という可能性と非大人である可能性は無知と無垢、非力と可能性、素朴と粗野という点において描かれるといえる。

本稿は、それらの要素が説話化した『沙石集』における「子ども」が描かれている説話の分析を通じて「子どもの構造」を考察するものである。

## 本 論

### 1

『沙石集』の「神明慈悲ヲ貴給事」における子ども「少物両三人」の描かれ方は「子どもとはかくあるもの」の視点をもって描かれている。『沙石集』における子どもの意思が明確に読み取れるのは道徳的に対象が明瞭な場合が多い。逆に「神明慈悲ヲ貴給事」のように複雑な対象であり、その困難な現象を自分および自分たち（兄弟、姉妹）に少しでも利するためには、複合的に入り組み絡まった事象を整理し優先順位を考え実現可能な所を探しだし解決を重ねていくことが必要となる。親の死により発生した様々な問題には12、3歳以前の子どもでは対応ができないのである。

或時只一人、(和州ノ三輪ノ上人、常観房) 吉野へ参リケル道ノ邊ニ、少物両三人並居テ、サメザメト泣ケレバ、何トナク哀レニ覚テ、「何事ニナクゾ」ト問ニ、十二三バカリナル女子申ケルハ、「母ニテ候モノ、<sup>わろきやまい</sup>悪病ヲシテ死テ侍ケルガ、父ハ遠ク行テ候ハズ。人ハイブセキ事ニ思ヒテ、見訪フ者モナシ。我身ハ女子ナリ。弟ハイルヒガヒナシ。只悲シサノ余ニ、泣ヨリ外ノ事侍ラズ」トテ、涙モカキ敢ズ。<sup>1)</sup> (巻一ノ四)

母の死が父の不在の家庭を襲い残された子どもたちを三輪の上人、常観房が助ける話である。この話では子どもたちのなかの年かさの12、3歳の娘がなんらの行為を示すことなく、只、泣き悲しんでいる様が描かれている。娘はまず母の葬儀、あるいはそれを省略しても母の体の始末をする必要に迫られている。この世の者が暮らす領域に死者を長い時間留めておくことはできない。しかしそれら一連の儀式としきたりの知識を有する共同体に属する長老はじめ世話をやく者は姿をみせない。「悪病」は「イブセキ」(きたなき) ことと思われたのが原因である。葬儀をとりおこない野辺の送りを共にする、または死体を生きている人と交わらない所に移動をしなくてはならない。そうした行いを手伝ってくれる人たちから手が差し伸べられない時、子どもたちは「サメザメト泣ケレ」ることが、唯一の行為だとしているのである。解決しなければならない問題を整理してみると次のような点が出てくる。まず、母の死体の始末、これについては、伝染病の可能性もある。次に、父

の代理として母が維持していただろう財産の今後の管理、そして、自分と弟たちの今後の身の振り方であろう。

『沙石集』の時代を役100年単位としてみても疫病の猛威を変えたいがために改元をおこなっている。『沙石集』の著作中の弘安5年（1282）には「十二月、夏以来、病事流布」<sup>2)</sup>とあり脱稿（3）した弘安6年（1283年）にもかかわらず、「五月二十九日、有小除日、云云、依世間病事 雨等事也。七月二十日、被発遣五社奉幣使、依天下疾病也」<sup>3)</sup>と疫病の記録はみえる。「悪病」が伝染性のものであったのであろうか。それならば多くの人が近づくことを避けたのは当然であろう。

また財産があると仮定して、鎌倉時代においても「武家の慣習が、女子の戸主たり財産の所有たることを認め」<sup>4)</sup>られているが「我身ハ女子ナリ」と言うところからは、男子である弟の相続が順当であるが、相当の年となるまではどのように暮らしていくのかも母の体の始末のあと早急に、なんらかの判断をしなければならない問題であり、しなければ自分たちが持ち得ている権利は周りの善意と悪意により、なくなることは明らかである。このような問題が山積したときに出会えたのが三輪の上人の常観房である。

誠ニ心ノ内、サコソト哀レニ覚ケレバ、今度ノ物詣ヲ止メテ見助ケテ、イツニテモ参リナン  
ト思テ、便宜チカキ野ベエ持チテ捨ツツ、陀羅尼ナド唱ヘテ急ニ訪テ、 卷一ノ四

事の始末をつける心と能力を有する三輪の上人常観房に救われている。他者からも顧みられないまま不安の世間に投げ出された子どもの無力さを記している。

また、「芳心ある人の事」に途方に暮れる様が描かれている。この話も親に死に別れた子どもの話である。

近キ所ノ地頭、世間不階ニシテ、所領ヲ年々ニ売ケルヲ、タビタビニ皆買トリテ〔ケリ〕。  
サテ彼地頭世間もヲトロヘ、ツイニ身マカリヌ。只獨リアリケル子息ニ、財産モ所領モ無レバ  
譲ル〔ニ〕不及。ヒタソラ惑物ニテ待ケル。 卷九ノ四

子息とばかり本稿で対象とする子どもの範囲に入るかは疑問であるが、「神明慈悲ヲ貴給事」とおなじく山積する問題を前に心乱れ（まどう）ているのみの姿がある。一門の者を頼るがみな財力豊かな者もなく、所領を買った「世間豊かな地頭」の芳心に一族がすがることとなる。子息はこの間「心まどいて」なんら自らの行動を取ることができないでいる。一族の者たちがこの子息を安楽にするための知恵を出し、行動に移し、更に「世間豊かな地頭」の芳心と財力により永らえることができた。「彼子息、親トモ主トモ一筋ニ頼ミ入テ、常時アリト聞ユ」のである。

親から離れた子どもの無力さは「子どもとはかくあるもの」との観念からの構成ではなかったか。そのような存在である子どもであるために親は様々なことを行ったのである。そこには相当の無理

や悪行といえる行為もあったのであろう。

「地蔵菩薩種々利益事」には子育てに読むものが子育ての困難さを思い測るのではないかと思われる説話が記されている。論識房の死により庵室を譲られた弟子の讃岐房も「聊カ煩フ事アリテ、息絶ヌ」ところで始まる。ところがその讃岐房は「一日一夜アリテ蘇テ語ケルハ、「炎魔王宮へ参リテ、報命ヲ勸ヘラレツルニ、「報命未ダ盡ズ」トテ、打捨ラル」と蘇生しこの世に戻ってくる。彼はあの世の入り口から地蔵菩薩により「焰魔王ノ御前ニ具シテオワシマシテ、「実ニ此法師ハ、御許レテアルニヤ」ト、仰ラルレバ、「去事候、許シテ侍」ト申給ヘバ、「サラバ、ヤガテイザ」トテ、廣キ野中ヲ遙々ト具シテオワシマス」と帰ってくるのである。その途次のことである。「野中ニ、餓鬼ドモ幾ラトイフ数モ知ラズ有ケリ。其形ヲ繪ニ書違ズ」という中をこの世に向かうのである。ところがそこで親であるという餓鬼に声をかけられる。

アル餓鬼ノ申ケルハ、「アノ讃岐房ハ我子ナリ。アレヲ養フトテ、多クノ罪ヲ作りテ、此ノ報ヲ受テ、飢渴ノ苦ミニ責ラレテ、術ナク候ニ、アレ給リテ食候ハン」ト申ケレバ、「僻事也。是ハ汝ガ子ニ少モ違ヌ別ノ者也」ト仰ラルルニ、慥ニ我子ニテ侍リ。所モ父モシカシカ」ト、申ケレドモ、「ソゾロ事ゾ。カレニ似タル別ノ者也。イザイザ」トテ、ヤガテ具シテヲハス。猶、「哀哀」ト餓鬼申セドモ、用ヒ給ハデ、遥ニ行過テ、「実ニハ彼ハ汝ガ母ナリ。汝ヲ養シ故ニ、カノ報ヲ得タリ。然レドモ、汝ヲ食シタルトモ、其苦タスカル事モ久シカルマジ。又汝人間ニ生レテ、思出モナクシテ、命ヲ失ハン事モ不便ナレバ、我空言ヲシテ、汝ヲ助ツルナリ。穴賢穴賢。母ノ孝養能能営テ、カノ苦患ヲタスケ、己ガ後生菩薩ノ為ニ、勤メ行フベシ。

卷二ノ六

讃岐房の父母は、この世ならぬところで飢渴の苦しみに悶えている。それは子どもである、讃岐房を養うために重ねた罪のためである。餓鬼となった父はその苦しみを一時でも緩和しようと、わが子讃岐の房にその身を食わせると言うが、同じく餓鬼となった母は違う。父である夫に、「空言ヲシテ」よく似てはいるが他人であると言い、父の食いたいという意識を変えてしまう。このような犠牲を払っても行う子育てとはいかようなものであろう。そこには子どもの脆弱性がある。親からみた子どもは罹患と怪我を繰り返し、知識と経験が乏しく世間という嵐に遭遇した時、遭難する要素をもって映るのであろう。そのために親は子どもの弱点を補い、子どもが世間で生きていけるようにと、愛と財貨を子どもに惜しみなく使う。そこには非道も生まれる可能性がある。この親はどのような心と財貨を費やしたのであろうか。

説話では讃岐の房は師の房の庵室を継承している。ということは同じような暮らし向きであったと考えられる。その暮らしを成り立たせるには同様な知的能力と財力を要していたということである。それは、「小田作ヲセテ時料トシ、庵室ヲ構ヘテ隠居シツツ、法華経ヨミテ、後世ノ事ニ思アテケリ」とされる生活の心配をしなくてよい信仰三昧の暮らしである。どのように継承したのであ

ろうか。説話では触れていないが父母をして、養育のために重ねた行為の報いというのが、餓鬼になったことであったわけである。田畑を人に貸しその小作料で、経典を読むというのであるからには、相応なものをかけていたのであろう。

前述のごとく、認識として子どもの存在は脆弱に映る。子どもは複雑極まりない問題への対し方を知らない。だから親は子どもに自己犠牲的な愛と教育（伝承）を傾けていくことになる。子どもの存在に対する親の観念が読み取れるのであり現代と共通する側面をもっていると考えられる。

## 2

親の認識からみるならば、子どもは、極めて脆弱で危機に弱い存在と捉えることはある側面ではないことは論をまたない。子どもに潜在する能力は目的をもった時点で発揮されるものである。前章でとりあげた説話は、現前の複雑な事象から目的を設定できない子どもの存在と、であるからこそ親は子を導かなければならなかった必然性を合わせて考察した。

子どもはどのような期待をもって描かれているのであろう。筆者は本論集の第2号ですでに「幼少ノ子息父ノ敵打タル事」をとりあげ子どもの行為について論じている。行為における明瞭な目的の設定は子どもの内にある倫理観の発露であると思われる。その倫理観はどのように子どもの内に涵養されたのであろうか。それは子どもより年上のものから、倫理観を涵養する種がまかれたと考えられる。それは親、兄弟であり親戚、親族である。また師であり年高の朋友であり一方では、世間でもあったろう。

その蒔かれた倫理観の種には蒔いた者たちの子どもへの期待が含まれているのは当然であろう。その期待とはどのようなものであったか、「上人ノ看病シタル事」を見てみたい。

坂東ノ或山寺ノ別當、學生ニテ上人ナリケレバ、弟子門徒多カリケレドモ、年タケテ中風シ、床臥テ身ハ不合期ナ〔ガ〕ラ、命ハナガラヘテ、年月ヲ送程、弟子共モ看病シツカレテ、ハテハ打ステツ。イツクヨリトモナク、女人一人出来テ、「御看病申サム事イカニ」ト云ヘバ、弟子共、「可燃」トテ、ユルシツ。エモイワズ、ネムゴロニ看病シケリ。「イカナル人ゾ」ト問ヘド、「マドイ物ニテ候。人ニシラレマイラスベキ物ニモアラズ」

卷四ノ三

本説話を現代的に解釈すると、別當は脳血管障害による麻痺を発症し弟子たちがその介護を担うようになる。しかし回復の兆しもないまま長期化するという介護に弟子たちは倦怠と介護疲れが現れたのであろう。介護放棄とネグレクトがおきていたのではないか。そこにどのような人とも分からぬ女性が現れ丁寧な看病をするのであるから別當の感謝はあまりある。

アマリニ難有看病シ、月日モヘニケレバ、此病人申ケルハ、「佛法世法ノ恩ヲカウブレル、年来ノ弟子ダニモ、ステテ侍ルニ、コレ程ネムゴロニ看病給ヘルハ、可燃先世ノ契ニコソトマデ、

アマリニ難有思給ヘルニ、イタク隠シ給コソ、イブセケレ。

卷四ノ三

別当にとっては、病の師を弟子が看することは倫理観の帰結である。その弟子に打ち捨てられたことは残念であるが内なる不徳とするならば、苦痛と悲哀は別にして納得のいくことなのである。であっても、自らすすんで介護にあたる「マドイ物」と称する女性の精神性は到底理解できるものではなく、「先世ノ契」という仏法の観念で無理に納得をしようとするが、それよりも感謝の念が上回っていると捉えられるのである。

抑何ナル人ニテ御坐ゾ」ト、強ニ問ケレバ、「実ニ今ハ申侍ラム。コレハソノカミ思カケヌ縁ニアヒテ、思ノ外ナル御事ノ候ケル某ト申ス者ノムスメナリ。其ニハカクトモ知セ給ネデモ、母ニテ候者ノ、「汝カカル事ニテアリ」ト申シカバ、我身心許ハ御ムスメト思ツツ、アハレ見モ奉ラムヤト、年来乍思、カカル身ニテハ萬ヅ憚リアリテ、空ク年月ヲ送候ツルニ、此御病ニ御看病ノ人モ疲テ、事カケタルヨシ承テ、御孝養ニ、心安クアツカキ殺シ奉ラムト、思立テ候ツル」ト、泣ク泣語リケレバ、病人モマヤカニ志程ト哀ニ覚テ、涙モカキアエズ、「可燃親子ノ契コソ哀ナレ」トテ、互ニナツカシキ事ニテ、遂ニ最後マデ看病セラレテ、心安ク終ワリニケリ。

卷四ノ三

実の娘であることがわかり互いに思いはより近くなり、別当は安らかに死を迎えることができたのである。娘は父である別当に近づくことも、かなわず身をはるかに置いて眺める外はない立場であったのであろう。そのような時に別当である、父の病の発症を娘は知ることになる。父である別当の病氣と弟子の介護疲れは親子の名乗りのきっかけを作ることとなる。心はより深く触れ合い、亡くなっていく父の心は満たされたに違いない。

本説話を通して、庶子と嫡子とに関わらず、子どもと父との喜びが描かれている。しかしこの説話を「子どもとはかくあるべきもの」という観点からみることができるであろうか。この娘の至純な行為と他人である弟子たちの心と対比が見られる。弟子は師の恩に放置とまではいかないが、充分に報いているともいえない。それに比して今まで名乗ることもできず、耐えしのんできた娘は「ネムゴロ」に介護をしている。娘の行為と意識は、親を中心とした世間の期待でもある。それをあえて拡大すると揺らぎつつある幕府と御家人との間柄を御恩と奉公の関係に戻す意識とも考えられる。

子どもの捧げた至純な思いは次のように叙述される。

至孝ノ志コソ、難有覚ヘ侍レ。人ノ子ニ、男子ヨリモ、女子ハ孝養ノ心モ侍リ、養育ノ勤モ、ネムゴロナル事申モ、コトワリニコソ。

卷四ノ三

孝女の美しき行為の賞賛と女子は男子より孝養をつくす心が厚いことをのべている。育てた子どもへの期待とは孝養への期待となっていることが考えられる。その範囲の内で考察をすると前論集の拙稿がとりあげた「幼少ノ子息父ノ敵打タル事」の親、世間、幕府という価値観のヒエラルキーに準じているのであろうか。複雑多様な事実の内に定めなくてはいけない目的を見つけることができないう子どもも、単純明快な対象に対して、例えそれが重大な事実であったとしても、目的をもつことができるのである。その目的の設定は文化的、また時代における精神的な価値観からの影響が大きいことは当然なことと言える。

## 3

子ども本来の存在は多様な面を持つが、大人は自己の現在のあり方を補完するために子どもを認識していることがある。『沙石集』の前半における子どもの登場はいわゆる大人の都合ともいう視点で書かれているとも解釈ができる。

脆弱でありながら、他面においては大人をも凌ぐ果敢な行為をみせ、さらに無垢な面を持っていると大人は見ている。その、それぞれは大人にとり、教育、価値観と財産の継承の対象となり認識されている。さらに「子どもはかくありたいもの」としての子どもは無垢なる言動をもって、大人を安らぎの対象ともさせるが、時には赤面もさせることとなる。

南都ニ或律僧、世間ニナリテ子息アマタアリケル中ニ、殊ニ糸惜スル〔子〕五歳時、知タル上人兩三人、彼坊ニ行テ物語スル次ニ、此子、ガが膝ノ上ニ居テアルヲ、「キヤツハ不覚ノ物ニテ候。コレ程ニナリテ、父トハスベテネズシテ、母トノミフセリ候」ト云時、此子父ガヒザヲツイ立テ、内へ入ルサマニ、「父ハ我ヲバ母トヌルト云ヘドモ、父モイマダ母トハヌルトハ」ト云。実ニサモト覚テヲカシク、イタキケシタリシヨシ語り侍リキ。父ヲ恥シメ教ニ似タリ。

卷三ノ六

大人の男性同士の雑談に混じった子どもの発言はその父を赤面させることになる。子どもは大人のようにあたりを憚り、遠慮をし、自己の保身を願うものではないという前提がこの説話から読み取れる。僧籍にいる者たちと世間にいるものとの寛いだ雰囲気や窺い知れるところである。現在は世間にあるが、もと僧籍にいた者と、僧籍に居る者との交わりには微妙な分け隔てがあるのではないか。その、あるかなきか、微妙でありながら、厳然とある境界の双方を往来できるものとしての子どもが描かれる。あきらかに無垢なものとして聖と俗とを結ぶ媒介の役をもっているのである。もと僧籍にあった父としてはそれを期待して子どもを伴ったのでないにせよ、そこに示されているのは聖と俗の架け橋としての子どもの役割である。

この場で両者との間に交わされる話題としては子どもの教育、躰、成長は、無難で親しみの持てるものである。それぞれがそれぞれの身に引き寄せて思いを馳せることのできる話題である。五歳

にして母とばかり寝ている子どもの不覚を嘆くことは、もと僧籍にあった父にとり、周りの者から悪意と罪と責任のない同情を導きだしその場の和やかさを醸し出し意図があったのであろう。子どもは無垢な存在であるから決して「不覚」と評してもそれが汚点になるはずはないのである。

ところが子どもは無垢ではあるが無知でもある。その無知は無批判となる。大人では避けるはずのことを、衆人の場で口にするのである。「父と母との同衾」は無垢の目がなんらの意図もなく映しとった単なる事実である。父である僧籍であった男はひたすら恥じ入ったことであろう。しかしそれは世間にある「子息アマタアリケル」男の並みの暮らしの一端が図らずも現れただけのことで罪とも咎とも関わることのない「ヲカシク」と感じられることだけなのである。子どもの、無垢な「目」は反面、不埒な者としての機能を備え、大人の様々な行為を認知することを示している。また単純に大人の意図と子どもの無邪気さとも読み取れるのである。もしこの場が聖なる領域ではなく俗世界であり、集う者が俗人ばかりであったとするならば、こうした話題は、父が恥じ入るだけでは終わらなかったであろう。

#### おわりに

『沙石集』の子どもは大人・社会側からは構造的に次のように考えられる。無力で脆弱なものとして「存在」し、その「思考」と「行為」は至純性の高いものである。そして「精神の素地」は純粹にして無垢なるものである。これらのことを期待される子どもの姿は現代の子どもが置かれているものに通じるのではないか。歴史的な事象に現れる子どもと現代の子どもにおける普遍性を考えるとき、大人側からの意図が双方を結ぶ視点として見受けられる。本論の「はじめに」で記した「子どもとはかくあるもの」または「かくあるべきもの」そして「かくありたいもの」という大人の意図である。それを穿てみれば複合的な存在である子どもの内に多様な価値があるにも関わらず、そこから大人にとり都合のよい点のみを強調させる行為とも考えられる。また、それが文明であり文化であるとも考えられるのである。大人はこの意図を媒介として子どもを見て認識しようとするのではないか。本論において筆者がとりあげた「子ども」は、それぞれに大人が認識した、または認識しなかった姿なのであると捉えられる。

大人は善意、悪意の有無に関わらず子ども本来の姿を見ることができるのであろうか。大人は往々にして、自分が認識をしたい面のみからしか子どもを見ていると思われる。であるなら、子どもの存在とは何かという本質的な問いが現れるのである。本論での子どもとは、再度繰り返すが脆弱で一途で至純な行為をし「無垢な心」で大人や世間を見つめ、そして確認はできないが「その他多くのもの」を持っているものである。この「その他」のものが、まだ見えて来ないのを今後の課題として文学本来の研究法に隣接した科学の応用を加え、新たな考察を重ねて説話文学を読み解き、子どもにおける普遍性を考究したい。同時に並行して自らのことを言えなかった過去の時代と、現代の対比から捉える子どもの普遍性も求めなくてはならないと考えるのである。



### 引用文献

- 1) 渡邊綱也校注：日本文学大系85、沙石集、67、14～18、岩波書店（東京）、968年  
以下本文の引用は全て体系本による
- 2) 富士川游：日本疾病史、40、15、平凡社（東京）、1971年
- 3) 富士川游：日本疾病史、40、17～18、平凡社（東京）、1971年
- 4) 三浦周行：続法制史之研究、1068、12～13、岩波書店（東京）、1958年

### 参考文献

- 1) 小西律：作品に描かれた子ども No2 『宇治拾遺物語』『沙石集』『古今著聞集』を通して  
近畿大学豊岡短期大学論集No2、近畿大学豊岡短期大学（豊岡）、2005年
- 2) 三浦周行：法制史之研究、岩波書店（東京）、1958年
- 3) 服部敏良：鎌倉時代医学史の研究：吉川弘文館（東京）、1988年
- 4) フィリップ・アリエス著 杉山光信・杉山恵美子訳

